

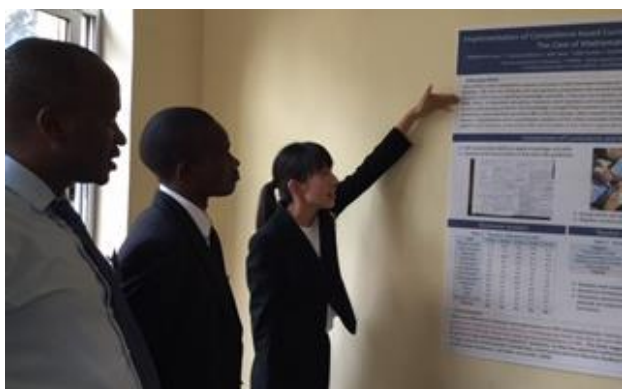
ルワンダの国際研究集会で研究発表しました

山下華奈（大学院 教科・領域教育専攻 国際教育コース L2）



2017年8月22日(火)から25日(金)まで、ルワンダ大学教育学部で開催された国際研究集会（Distance Education and Teachers' Training in Africa: DETA 2017）に参加し、研究発表を行いました。

2017年3月にJICA技術支援プロジェクト「ルワンダ国学校ベースの現職教員研修の制度化・質の改善支援プロジェクト」(SIIQS)のベースライン調査に補助員として同行させていただくという貴重な機会を得ました。本研究集会では、その際収集したデータの分析をもとに、小野由美子先生（現早稲田大学招聘研究員）とプロジェクト・メンバーとの共同研究として、「ルワンダにおける新カリキュラム（CBC）導入状況：数学の授業に焦点を当てて」と題する発表を行いました。



ルワンダ共和国では、2016年から新カリキュラムが導入され、従来の知識技能の獲得の重視にかわり、知識技能の活用に焦点が当てられるようになりました。本研究では、ルワンダの初等中等学校の数学の授業を事例に、教員がどのように新カリキュラムを受容し授業を構成しているかを明らかにすることを目的としました。研究手法として、新カリキュラムと旧カリキュラムの比較、カリキュラムと指導案の比較、カリキュラムと実際の授業の比較を行

い、その後、ビデオデータをもとに、教員生徒双方の発話分析及び教員の発問の分析を行いました。その結果、学習指導案に書かれた授業目標、活動内容及び獲得されるコンピテンシーは新カリキュラムに基づいているものの、実際の授業はグループワークを用いるという授業形態にのみとられ、本来コンピテンシー獲得前に習得されるべき知識技能の習得に繋がらない学習活動が用いられていることを明らかにしました。さらに、発話分析と発問分析の結果、即答できる発問がほとんどで、数学的な思考力を向上させる発問が僅かであることがわかりました。以上から、新カリキュラムで目指されている授業と実際の授業にはかい離がみられるとの結論を導きました。また、校内研修等を通して、学習活動や教員の発問をどう構成すれば生徒の知識技能の獲得を促し、コンピテンシー獲得につなげることができるのかを教員に考えてもらう必要性を示唆しました。

もともとポスター発表での参加申し込みであったため、3日間ポスターを掲示し、見に来てくださった方々へ研究内容の説明を行いました。ポスターは一目見て伝わるレイアウトになるよう工夫して制作しました。学会2日目には、口頭発表の場へポスターを持ち込んでプレゼンテーションさせていただく機

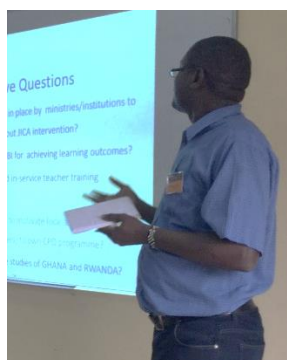
会を得ましたが、ちょうど停電と重なったため、ポスターを用いての口頭発表が効果を発揮するという



予想外の展開でした。多くの質問の中で、特に、「教員が新カリキュラムのコンセプトを理解しているのか、理解しているが授業で実践することができないのか。」という質問には考えさせられました。私自身、数学の授業をする中で、どれだけ生徒の深い考えを促す発問が実際にできているのか正直わかりません。今後、教育実習や大学での学びを通して、授業実践力を高めるとともに、自分の修士論文のテーマでもあるこの研究をよりよいものにしていきたいです。



本学会には、サブサハラを中心に 15 カ国からの参加者が集い、鳴門教育大学大学院の修了生や研修修了生も多く参加されていました（修了生：サキナ・アクワさん（ガーナ）、キジト・マコバさん（ケニア）、アントワン・ムツィンジさん（ルワンダ）、セオフィーレ・ンセンギマーナさん（ルワンダ））。初めての学会発表、それも国際研究集会での英語での発表ということで大変緊張しましたが、滞在中、本学修了生の方々に気さくに声をかけていただき、励ましていただき、とても心強かったです。



キジトさん（ケ）



サキナさん（ガ）



セオフィーレさん（ル）



アントワンさん（ル）

一週間実りある日々を過ごし、帰路についたところで飛行機の遅延、荷物の未着という事態に見舞われることになりました。しかし、国際交流係をはじめとした本学職員の方々が迅速な対応をしてくださったおかげで、教育実習が始まる前に鳴門へ帰ることができました。

小野由美子先生をはじめ、ご支援、ご指導いただきました先生方ならびに本学職員の皆様、ルワンダで出会い刺激的なお話をお聞かせくださった方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。大変貴重な機会を設けてくださり、また、温かく見守ってくださり、本当にありがとうございました。